

平成27年1月8日

## 事業経過報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

都道府県教育委員会等名 千葉県教育委員会

所 在 地 千葉県千葉市中央区市場町1-1

代表者職氏名 千葉県教育委員会教育長

内藤 敏也

平成27年度英語教育強化地域拠点事業における事業経過報告書を提出します。

## 1. 事業の実施期間

委託を受けた日 ～ 平成28年3月31日

## 2. 強化地域拠点の学校名 (学校数が多い場合は欄を追加すること)

ふりがな	ちばけんりつ ながれやまおおたかのもりこうがっこう	ふりがな	よしだ とみのり
学校名	千葉県立流山おおたかの森高等学校	校長名	吉田 富昇
ふりがな	ちばけんながれやましりつ みなみながれやまちゅうがっこう	ふりがな	こばやし のぶや
学校名	千葉県流山市立南流山中学校	校長名	小林 信弥
ふりがな	ちばけんながれやましりつ にしはついでしちゅうがっこう	ふりがな	たかはし とおる
学校名	千葉県流山市立西初石中学校	校長名	高橋 徹
ふりがな	ちばけんながれやましりつ みなみながれやましようがっこう	ふりがな	はしもと みきお
学校名	千葉県流山市立南流山小学校	校長名	橋本 美喜夫
ふりがな	ちばけんながれやましりつ ひれがさきしょうがっこう	ふりがな	いわい まさき
学校名	千葉県流山市立鱈ヶ崎小学校	校長名	岩井 雅規
ふりがな	ちばけんながれやましりつ にしはついでししょうがっこう	ふりがな	さわで としみつ
学校名	千葉県流山市立西初石小学校	校長名	澤出 敏光

### 3. 研究内容

#### (1) 研究開発課題

自らの意見を述べ、自国の文化や特徴を語ることのできる能力の育成を目指して、英語教育の実施学年の早期化及び教科化に基づいた小中高等学校の系統性のある教育課程及び評価方法の研究開発

#### (2) 研究の概要

小学校第3学年、第4学年では、外国語活動の在り方について“Hi, friends!”等を活用し研究を行う。小学校第5学年、第6学年では、流山市教育委員会が作成した『流山市英語プログラム』を使用し、英語科としての教材の有用性、指導方法と評価方法を研究する。カリキュラムに関する研修会等には中学校・高等学校教員も参加して理解を深めるとともに、児童生徒、教員間の交流や小中高のカリキュラムの接続を図り、小学校での学習を生かした教育内容の見直しを行う。

また、中学校、高等学校の接続に関しては、千葉県立流山おおたかの森高等学校と連携し、中学校における英語で行う授業の在り方、CAN-DO リストの作成と活用等について学校段階を踏まえた研究を行うとともに、高校生と小中学生の児童生徒及び教員の交流も継続して行い、英語を用いてコミュニケーションを図る多様な機会を設定する。具体的には、平成26年度に引き続き、流山おおたかの森高等学校コミュニケーション科の生徒が市内小学校を訪問し、授業を行う等を予定している。

#### (3) 現状の分析と仮説等

##### ①現状の分析と研究の目的

流山市は、つくばエクスプレス線の開業に伴い、都内近郊からの人口流入が進んでいる。そのため、年々児童生徒数や外国人数は増加傾向にあり、市民の英語教育への関心も高い。また、本市では、全市的に小中連携に力を入れており、教員同士の交流や合同の研究会、一部兼務発令による授業等にも取り組んでいる。

平成27年4月に開校する新設校を含め、市内小学校全16校には、外国の文化に精通した、英語に堪能な地域人材を各1名配置し、1名増員して4名となるネイティブスピーカー（ALT）とともに外国語指導を行う予定である。研究校においては、第3学年、第4学年は“Hi, friends!”を、第5学年、第6学年は、“Hi, friends!”と『流山市英語プログラム』を併用し、担任主導による外国語指導を行っている。第1学年、第2学年では、発達段階を考慮した学習内容になるように、使用する言語材料や提示の仕方などを工夫し、ネイティブスピーカー主導のティームティーチングによる外国語活動を行っている。

小学校同様、平成27年に開校する新設校を含め、市内中学校全9校には、ネイティブスピーカー（ALT）を各1名配置し、生徒や教師が日常的に英語に触れることができる環境を整えている。生徒は、休み時間や放課後に、ALTに話しかけたり、外国の文化を紹介する掲示物や配布物に興味を示したりするなど、英語や外国の文化、日本と外国との違いなどに一層関心を持つようになってきている。また、授業を英語で行うことで、英語を使うことへの興味関心が高まり、英検の取得率の増加、スピーチコンテストの参加生徒数の増加など、英語学習への意欲が向上している。しかし、「聞くこと」「話すこと」に関する取り組みを多く経験してきている生徒であるので、文字の導入時の指導や小学校の学習とのつながり、体験してきたことをどう生かし、学

習内容を高度化していくか、「理解の能力」、「表現の能力」をどのように高めていくかに課題がある。

以上のことから、研究校において、以下5点について研究開発を行う。

- 1) 小学校第3学年，第4学年で週1時間行う外国語活動の指導と評価
- 2) 小学校第3学年，第4学年の外国語活動から5，6学年の英語科への円滑な接続の在り方
- 3) 小学校第5学年，第6学年の英語科の指導内容と評価方法
- 4) 小学校第3学年から中学校第3学年までの学習到達目標の設定及びそれに基づく指導法と評価方法の検証
- 5) 中高連携による英語で行う授業の在り方，学習内容の高度化

#### ②研究仮説

- 1) 小学校第3学年，第4学年の外国語活動を週1時間確保し，児童の発達の段階及び他教科の学習内容を考慮しながら，共通教材“Hi, friends!”を活用することで，指導法や学習方法，評価の一貫性が保たれ，コミュニケーション能力の素地が育成されるであろう。
- 2) 小学校3，4学年での外国語活動をもとに，第5学年，第6学年において，中学校との円滑な接続を視野に入れた適切な教材やカリキュラムを開発することにより，小・中学校を通じて，「表現の能力」，「理解の能力」が高まり，コミュニケーション能力の基礎が養われるであろう。
- 3) 小学校での英語の教科化を受けて，小中高を通じた学習到達目標を適切に設定し，能力の育成を重視した指導を行うことで，自らの意見を述べ，自国の文化や特徴を語ることのできる能力が育成されるであろう。

#### ③研究成果の評価方法

- 1) 課題認識の的確性（英語教育強化地域拠点校英語担当者会での聞き取り）
  - ・各学校の課題意識や解決手段等の共通認識がなされた上で，各学校での研究が行なわれているか。
- 2) 計画や手順の妥当性（教員，保護者へのアンケートの実施）
  - ・研究課題にあった計画が全職員の共通理解のもとに作成されているか。
  - ・児童生徒の実態や学校，地域社会の現状を踏まえ，無理のない計画となっているか。
  - ・当初のねらいどおりに研究が進行しているか。
  - ・全教職員の士気が高まっているか。
  - ・児童生徒の変容や保護者等の反応などが的確に把握されているか。
- 3) 研究のねらいの達成度
  - ・小学校第3，4学年において，コミュニケーション能力の素地が養われているか。  
（授業中の見とりや成果物による児童の評価の蓄積，児童アンケートの実施）
  - ・小学校第5，6学年において，英語を聞いたり，話したり，読んだり，書いたりすることに慣れ，積極的にコミュニケーションを取ろうとする態度が育成されているか。  
（授業中の見とりや成果物，パフォーマンステスト，児童アンケートの実施）
  - ・中学校において，小学校との継続性のある指導方法，指導内容，カリキュラムとなっているか。（カリキュラムの妥当性の検証，中学1年生へアンケートの実施）
  - ・中学校において「表現の能力」，「理解の能力」が向上しているか。  
（パフォーマンステスト，定期テスト，外部検定試験の結果分析）

- ・教師の課題に対する認識や態度の変化が現れているか。  
(意識調査, 聞き取り, 児童生徒への理解, 教科への理解)

## 4) 研究の結果得られた結論の実証度

(児童生徒の実態把握→到達目標→手立て(実践)→評価のサイクルの確認)

## 5) 研究成果の一般性

- ・研究内容は, 市内全中学校区で実施可能か。(市主催の研修会での報告)

## (4) 研究開発型

	開始学年及び週当たり授業時数コマ			
	第一年次	第二年次	第三年次	第四年次
①小学校 外国語活動型	第3, 4, 5学年 1コマ	第3, 4学年 1コマ	第3, 4学年 1コマ	第3, 4学年 1コマ
②小学校 教科型	第6学年 1コマ	第5, 6学年 1コマ	第5, 6学年 2コマ	第5, 6学年 3コマ (内1コマ分は モジュール)

## (5) 研究計画

第一年次～第四年次, 校種別

小学校
-----

## 1年目(平成26年度)

1 研究対象児童 第3学年, 第4学年, 第5学年, 第6学年

## 2 (1) 外国語活動の研究

○年次目標 外国語に親しみ, 積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成

- ① 身近な英語に興味を持つことができる
- ② 英語を使って人と関わろうとすることができる

## (2) 英語科の研究

○年次目標 英語を聞いたり, 話したり, 読んだり, 書いたりして, 積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成

- ① 文字に興味を持ち, 親しむことができる

## 3 目標を達成するための指導法の研究

(1) 第3学年, 第4学年の外国語活動の効果的な指導の在り方の研究

- ① “Hi, friends! 1” の活用
- ② 発達の段階や他教科の学習内容等を踏まえ, 各学年にあった学習内容, 指導法, 評価方法

(2) 第5学年, 第6学年の英語科との接続に配慮した外国語活動の研究

- ① “Hi, friends! 2” と『流山市英語プログラムの活用』
- ② 第6学年の英語科につながる指導の在り方

(3) 第6学年 英語科としての外国語指導の在り方の研究

- ① 外国語活動と教科としての英語科の趣旨
- ② 『流山市英語プログラム』を活用した第6学年の学習到達目標の在り方, 指導法

**2年目（平成27年度）**

1 研究対象児童 第3学年, 第4学年, 第5学年, 第6学年

2 (1) 外国語活動の研究

○年次目標 外国語に慣れ親しみ, 積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成

- ① 身近な英語に興味を持つことができる
- ② 英語を使って人と関わろうとすることができる

(2) 英語科の研究

○年次目標 英語を聞いたり, 話したり, 読んだり, 書いたりして, 積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成

- ① 文字を使って行う活動に興味を持ち, 取り組むことができる
- ② 英語を使って, 考えや気持ちを伝える楽しさや大切さがわかる

3 目標を達成するための指導法の研究

(1) 第3学年, 第4学年 外国語活動の効果的な指導の在り方の研究

- ① “Hi, friends! 1” (第3学年) “Hi, friends! 2” (第4学年) の活用
- ② 発達の段階や他教科の学習内容等を踏まえ, 各学年にあった学習内容, 指導法, 評価方法

(2) 第5学年, 第6学年 英語科としての外国語指導の在り方の研究

- ① “Hi, friends! 2” と『流山市英語プログラム』の活用
- ② 外国語活動と教科としての英語科の趣旨
- ③ 『流山市英語プログラム』を活用した第6学年の学習到達目標の設定, 指導内容, 指導法, 評価方法の検討
- ④ 平成28年度の時間数増に向けたカリキュラムの作成
- ⑤ 文部科学省作成の補助教材の研究

**3年目（平成28年度）**

1 研究対象児童 第3学年, 第4学年, 第5学年, 第6学年

2 (1) 外国語活動の研究

○年次目標 外国語に慣れ親しみ, 積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成

- ① 身近な英語に興味を持つことができる
- ② 英語を使って人と関わろうとすることができる

(2) 英語科の研究

○年次目標 英語を聞いたり, 話したり, 読んだり, 書いたりして, 積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成

- ① 文字を使って行う活動に興味を持ち, 取り組むことができる
- ② 英語を使って, 考えや気持ちを伝える楽しさや大切さがわかる
- ③ 学習した表現や単語を使って, 積極的にコミュニケーションを図ろうとする

### 3 目標を達成するための指導法の研究

#### (1) 第3学年, 第4学年 外国語活動の効果的な指導の在り方の研究

- ① “Hi, friends! 1” (第3学年) “Hi, friends! 2” (第4学年) の活用
- ② 各学年にあった学習内容, 指導法, 評価方法のまとめと学習到達目標の設定

#### (2) 第5学年, 第6学年 英語科としての外国語指導の在り方と評価

- ① 流山市英語プログラムと文部科学省作成補助教材の活用
- ② 学習到達目標の設定と『流山市英語プログラム』と文部科学省作成補助教材を併用した指導内容, 指導法, 評価方法のまとめ
- ③ 平成29年度モジュールでの指導内容の検討及び教材作成

### 4年目(平成29年度)

#### 1 研究対象児童 第3学年, 第4学年, 第5学年, 第6学年

#### 2 (1) 外国語活動の研究

○年次目標 外国語に慣れ親しみ, 積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成

- ① 身近な英語に興味を持つことができる
- ② 英語を使って人と関わろうとすることができる

#### (2) 英語科の研究

○年次目標 英語を聞いたり, 話したり, 読んだり, 書いたりして, 積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成

- ① 文字を使って行う活動に興味を持ち, 取り組むことができる
- ② 英語を使って, 考えや気持ちを伝える楽しさや大切さがわかる
- ③ 学習した表現や単語を使って, 積極的にコミュニケーションを図ろうとする

### 3 目標を達成するための指導法の研究

#### (1) 第3学年, 第4学年 外国語活動の効果的な指導の在り方の研究

- ① “Hi, friends! 1” (第3学年) “Hi, friends! 2” (第4学年) の活用
- ② 各学年にあった学習内容, 指導法, 評価方法のまとめと学習到達目標の検証

#### (2) 第5学年, 第6学年 英語科としての外国語指導の在り方と評価

- ① 『流山市英語プログラム』と文部科学省作成補助教材の活用
- ② 学習到達目標の設定と流山市英語プログラムと文部科学省作成補助教材を併用した指導内容, 指導法, 評価方法のまとめ
- ③ 平成29年度モジュールでの指導内容の検討及び教材作成

#### ○平成27年度の進捗状況・課題

第3学年, 第4学年においては, 主に“Hi, friends!”を使用し, 発達段階, 児童の興味関心, 他教科の学習内容との関連を考慮し, 学習内容を工夫している。音声による指導を中心とし, 英語の歌やチャンツによるウォーミングアップ, 電子黒板を使用した音声教材による導入等で良質なインプットを心がけた。また, 指導者は, クラスルームイングリッシュをはじめ, 可能な限り英語での指示や説明を行っている。

第5学年, 第6学年においては, 主に流山市の独自教材である『流山市英語プログラム』を使用し, 必要に応じて“Hi, friends!”や電子黒板による映像・音声教材を併用している。学校行事

や他教科で学習した内容と『流山市英語プログラム』を関連づけた指導も行った。今年度の研究内容の一つに、「英語科としての外国語指導の在り方」があるが、CAN-DO リストを作成し、各学年の学習到達目標を設定することで、活動型と教科型の違いを踏まえた指導の在り方についての理解が深まった。

今後の課題は、小学校から中学校への円滑な移行のために、系統性のあるカリキュラムの接続を考えていくことである。より一層、小学校・中学校間の連携を密にし、小学校で学習した内容や到達度を確実に中学校へ引き継ぐとともに、高学年教科型における「読むこと」「書くこと」の指導については、小学校と中学校が連携してどのように系統立てて指導するかを検討していく必要がある。来年度は、年間35時間から70時間への時数増を予定しているため、新たな年間計画の作成を行っている。

児童への意識調査を年2回実施した。7月の調査では「英語が好き・どちらかといえば好き」と回答した児童は9割（表1）に迫っており、「授業の内容をどれくらい理解していると思いますか」については（表2）の結果となった。理解度については改善の必要がある。第5学年、6学年において「読むことが好き」「書くことが好き」と回答した児童は、「聞くことが好き」「話すことが好き」と回答した児童に比べて少ない。高学年の「読むこと」「書くこと」については、児童の実態を把握しながら興味関心、意欲が持てる授業を展開していく必要がある。

(表1) 「英語」が好きですか。						(表2) あなたは「英語の授業」の内容をどれくらい理解していると思いますか。						
	好き	どちらか といえば 好き	どちらか といえば きらい	きらい	無回答		理解 している	どちらか といえば理 解している	半分くらい 理解して いる	どちらか といえば 理解して いない	理解して いない	無回答
小3	70%	19%	2%	1%	1%	小3	41%	18%	33%	1%	2%	2%
小4	64%	25%	4%	2%	1%	小4	35%	29%	26%	4%	0%	4%
小5	61%	28%	4%	1%	1%	小5	32%	31%	27%	3%	0%	3%
小6	44%	42%	7%	4%	1%	小6	30%	34%	29%	2%	1%	1%
(表3) 英語を話すことが好きだ。						(表4) 英語を聞くことが好きだ。						
	そう思う	どちらか といえば そう 思う	どちらか といえば そう 思わない	そう思 わない	無回答		そう思う	どちらか といえば そう 思う	どちらか といえば そう 思わない	そう思 わない	無回答	
小3	45%	32%	12%	4%	4%	小3	48%	25%	13%	5%	6%	
小4	45%	33%	9%	7%	3%	小4	50%	29%	11%	3%	4%	
小5	38%	38%	14%	4%	3%	小5	44%	35%	13%	3%	2%	
小6	34%	39%	14%	9%	2%	小6	36%	36%	15%	8%	3%	
(表5) 英語の文字を読むことが好きだ。						(表6) 英語の文字を書くことが好きだ。						
	そう思う	どちらか といえば そう 思う	どちらか といえば そう 思わない	そう思 わない	無回答		そう思う	どちらか といえば そう 思う	どちらか といえば そう 思わない	そう思 わない	無回答	
小5	34%	33%	20%	7%	3%	小5	44%	29%	16%	5%	3%	
小6	34%	26%	22%	13%	2%	小6	39%	32%	14%	11%	2%	

(鱈ヶ崎小学校)

- ・ 3, 4年生の外国語活動では『Hi, friends!』を活用しているが、発達段階に合わない単元や内容があるので、それを明確にして5, 6年生で再び扱うよう検討した。
- ・ 5, 6年生の英語科では「流山市英語プログラム」を中心に授業を行ったが、「Hi, friends!」も活用し、英語学習の経験の少なさを補った。
- ・ 5, 6年生では、英語科としての趣旨を考慮し、「書く」活動を意図的に毎時間取り入れた。英単語のcopyingを短時間ではあるが継続して行った。
- ・ 6年生の卒業時の到達目標を校内で検討し、それを基に各学年の「CAN-DO リスト」を作成し

た。

- ・文部科学省作成の補助教材の研究が不十分であるので、今後の課題である。
  - ・平成28年度の時間数増に向けたカリキュラムの作成を早急に行う必要がある。
- (南流山小学校)
- ・外国語活動については、『Hi, friends!』のねらいに即しながら、中学年の児童の実態を考慮して、取り扱う単語や定型表現を見直して実施することができた。また、必要に応じて視覚教材を補いながら、児童の関心を高めることができた。
  - ・英語科の目標及び内容を本校独自に設定し、それに沿ったCAN-DOリスト、年間計画の作成に取り組むことができた。
  - ・文部科学省の補助教材については、絵本「This is ME!」の活用を中心に研究を進めることができた。また、アルファベット教材やワークシートなど、朝の15分学習の中で活用を進めている。絵本「A letter to...」を活用した活動については、3学期に展開予定である。
  - ・平成28年度時間増に向けたカリキュラムについては、単元開発を行っている段階である。今後、小・小、小・中の連携を視野に入れて、各校の研究担当とともに作りあげていきたい。
- (西初石小学校)
- ・3年生から6年生について系統的な指導計画の作成を進めている。具体的には3、4年生で取り組む『Hi, friends!』の内容と、5、6年生で取り組む『流山市英語プログラム』の内容で発達段階上の矛盾が生じないかを吟味し、系統的な指導ができるようにしている。
  - ・英語科では、ただ単に英語を話したり、書いたりするのではなく、文法上の指導（例えば複数形のS）も適時入れている。外国語活動では、コミュニケーション能力の素地を育成するという観点から、文法上の間違いについては事細かには指摘・指導はしていない。
  - ・来年度から高学年は70時間実施になるので、指導計画の立案だけでなく英語活動指導員の割り振りも考えている。担任だけで行う単元や、英語活動指導員・ALTと複数で行う単元の洗い出しを行っている。

## 中学校

### 1年目（平成26年度）

- 1 研究対象生徒 第1学年
- 2 小学校との円滑な接続と外国語活動の成果を活かす指導の在り方
  - 年次目標 学習したことを活用して、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成
- 3 目標を達成するための指導法の研究
  - (1) 小学校の指導内容、指導方法と外国語活動を経験した生徒と英語科として学習してきた生徒それぞれへの配慮事項
  - (2) 言語材料についての知識や理解を深める言語活動の在り方
  - (3) 考えや気持ちを伝え合う言語活動の在り方
  - (4) 3年間を見通した学習到達目標の設定
  - (5) 英語で行う英語の授業（主に第1学年）の実施・検証



## 2年目（平成27年度）

- 1 研究対象生徒 第1学年，第2学年
- 2 小学校英語科の成果を活かす指導の在り方と言語活動の充実  
○年次目標 相手の意向や考えを理解し，積極的にコミュニケーションを図ろうとする力の育成
- 3 目標を達成するための指導法の研究
  - (1) 小学校英語科の指導内容，指導方法を活かす指導の在り方
  - (2) 言語活動を中心とした授業の在り方
  - (3) 「外国語表現の能力」「外国語理解の能力」の育成
  - (4) 3年間を見通した学習到達目標の設定
  - (5) 英語で行う英語の授業の実施・検証（主に第1～2学年）

## 3年目（平成28年度）

- 1 研究対象生徒 第1学年，第2学年，第3学年
- 2 「外国語表現の能力」「外国語理解の能力」の深長を図る指導の在り方  
○年次目標 相手の意向や考えを理解し，自らの考えを述べることができる力の育成
- 3 目標を達成するための指導法の研究
  - (1) 「外国語表現の能力」「外国語理解の能力」の伸長を図るための年間指導計画の見直し
  - (2) 「外国語表現の能力」「外国語理解の能力」の伸長を図る指導法と適切な評価方法
  - (3) 英語を実際に使用する機会の設定
  - (4) 小学校3年生から中学校3年生までを見通した学習到達目標の検討
  - (5) 英語で行う英語の授業の実証・検証（全学年）

## 4年目（平成29年度）

- 1 研究対象生徒 第1学年，第2学年，第3学年
- 2 4技能を統合的に活用できるコミュニケーション能力の育成  
○年次目標 相手の意向や考えを理解し，自らの考えや自国の文化や特徴を述べるができる力の育成
- 3 目標を達成するための指導法の研究
  - (1) 4技能を統合的に活用できる言語活動の在り方と適切な評価方法
  - (2) 「外国語表現の能力」「外国語理解の能力」の伸長を図る指導法と適切な評価方法
  - (3) 英語を実際に使用する機会の設定
  - (4) 小学校3年生から中学校3年生までを見通した学習到達目標の設定
  - (5) 英語で行う英語の授業の実施・検証（全学年）

### ○平成27年度の進捗状況・課題

英語を使う必然性が感じられる言語使用場面の設定を工夫し，ブレインストーミングやマッピングの手法を取り入れて，即興性を求める活動を実施することにより，生徒は仲間と考えや気持ちを伝え合う活動に，意欲的に取り組むことができた。

「授業は英語で行うことを基本とする」ということを徹底することができた。時には日本語の

説明を交えることもあったが、「英語を使う」ことを常に意識できた。また、「英語を使って何ができるか」ということを念頭に置いて、目標や評価基準を設定し、言語使用場面設定の工夫を行うことが日常化された。

中学校教員による小学校での出前授業や、小学校でのパフォーマンステストの評価者として連携・協力することにより、児童の発達段階や小学校での学習内容を知ることができた。これらのことを知ることは、小学校から中学校への円滑な接続を行うためには必要不可欠なことである。小学校で積み重ねてきたことを無駄にすることなく、さらに内容を深め、高い目標に向かって指導を充実させていきたい。高等学校とは、日常的な交流を行うことで、より専門的な知識を交流し合い、互いに学ぶべきところを見出すことができた。

(南流山中学校)

今年度のねらい、『language learner から language user へ』に向けて努力していることとして、下記の2点がある。

(1) 授業での英語の使用を増やす。

現在、英語の授業の70%程度を英語で行っている。教師から生徒への指示や説明などの、生徒が聴いて理解する場面での英語の使用は増えているが、生徒からの質問や意見を発表するなどの、生徒が表現する場面での英語の使用には、まだ物足りなさを感じるので、今後も努力をしていきたい。

(2) 英語で授業を行うために重要である、家庭学習の充実。

宿題としてプリントを作成し生徒に配布、授業前にそれを回収し、空き時間や放課後に丁寧に点検して返却をする、ということを行っている。プリントの内容は次の授業の予習であったり、文型や単語の練習であったり、教科書の内容の文化的背景を調べることであったり等、授業の進度に合わせ、工夫している。点検では、頑張りを認める一言をそえて返却するようにしている。今のところ宿題の提出率は良く、内容や練習の仕方を工夫する生徒が増えてきている。音読等の音声を中心とした家庭学習に導く工夫が、今後の課題と考えている。

(西初石中学校)

(1) 小学校英語科の指導内容、指導方法を活かす指導の在り方

- ・小学校において6年生の授業参観を実施し、授業の特性と進度を確認。
- ・中学校は、小学校の実態をつかみ、次年度の年間計画づくりに生かした。(『流山市英語プログラム』の理解)
- ・小学校6年生の3学期から中学校1年生の接続時期に注意した。中学校1年生の4、5月は小学校6年生の学習内容を踏まえ、復習を行ってから進んだ。
- ・拠点校会議で、小学校が抱える問題点について議論。

(2) 言語活動を中心とした授業の在り方

- ・文法指導を切り離して考えるのではなく、実際の場面に即した文法を教えることで、話すことへの意欲を育てた。
- ・CAN-DO リストを意識し、確認しながら授業を進めることで、話すことを中心に進められた。

(3) 「外国語表現の能力」「外国語理解の能力」の育成

- ・1年生は「自己紹介スピーチ」を行い、2年生はALTとの90sec.talkで会話をつなげた。意欲のある生徒は葛北英語発表会や、他のスピーチコンテストへ出場できる。
- ・毎授業の始まりのteacher's talkに力を入れ、生徒たちの話しやすい環境をつくる(現実的な

場面設定)。それにより即興で話せる力を育てる。

- ・教科書の **My Project** を活用し、それまでに習得した英語力を駆使できるように指導していく。  
(mapping を活用した **speech** の組み立て方)⇒2年生は「将来の夢」について **mapping** を見ながら1分以上スピーチ
- ・毎定期試験で、その時期行われた行事などを踏まえた **writing test** が組み込まれている。
- ・毎時間、英語で授業を行うことで生徒への英語の **input** を増やした。

(4) 3年間を見通した学習到達目標の設定

- ・CAN-DO リストを活用し、段階を踏んで英語力を育てる。

(5) 英語で行う英語の授業の実施・検証（主に第1～2年生）

- ・対象学年である 1, 2年生の授業においては、できる限り英語で授業を進め、必要であれば文法事項の説明などを含めて補助的に日本語を加えて行う。ただし、文法も絞ってスピーキング活動に活用することで、極力英語で行えるよう努力する。

【授業外における英語に触れる機会】

- ・毎週水曜日の給食準備中に ALT がその日のメニューと天気などのニュースを簡単な英語で放送する。
- ・1, 2年生は毎週金曜日の朝読書の時間を「英語の時間」とし、英語で書かれた簡単な時事ニュースを読み、簡単な質問に答える。

〈課題〉本来、言語活動を中心に行うことは、文法が苦手な生徒たちにとって多少の救いになると考えている。ただ、様々な試みを行うことで **input** が増え、それらが理解できない生徒たちにとっては **output** が急がれすぎて、話すことが苦痛になっているように感じる。**input** を増やすことは大切なことだと思うが、結果を急ぎすぎず、楽しんで学習させられるようにしていかなければ、英語を学ぶ意欲までも削いでしまう、と実感させられた。

## 高等学校

1年目（平成26年度）

1 研究対象生徒 普通科・国際コミュニケーション科 第1学年

2 学校設定科目「コミュニケーション基礎」のシラバスの研究

○（年次目標）『伝える力』の育成

- (1) 日常生活における身近な話題に関する情報や考えなどを、  
ア 聞いたり、読んだりして、概要を理解することができる。  
イ 話したり、書いたりして伝えることができる。
- (2) 英検3級レベルの語を **active vocabulary** として運用することができる。
- (3) 積極的に自己表現することができる。

3 目標を達成するための指導法の研究

- (1) 英語による英語の授業の指導法
- (2) 積極的に話す能力を身につける指導法
- (3) 情報や考えを伝える技能をつける指導法
- (4) 運用語彙サイズの拡充のための指導法

(5) 英文の語順や構文に慣れる指導法

#### 4 小中学校との連携

(1) 域内小学校英語担当教員，中学校英語科教員対象研修会の実施

(2) 域内小学校へ本校英語教員及び本校国際コミュニケーション科生徒を派遣し，英語活動を行う出前授業「高校生が先生」の実施（生徒の移動のためにバスが必要）

### 2年目（平成27年度）

1 研究対象生徒 普通科・国際コミュニケーション科 第1学年及び第2学年

2 学校設定科目「コミュニケーション活動Ⅰ」のシラバスの研究

○（年次目標）『伝え合う力』の育成

(1) 社会的な話題に関する情報や考えなどを伝え合うことができる。

(2) 自分の立場を明確にして意見を述べることができる。

(3) 英検準2級レベルの語を理解することができる。

(4) 話されたり書かれたりした内容について，質問したり感想を述べたりすることができる。

3 目標を達成するための指導法の研究

(1) コミュニケーション活動を段階的に指導する効果的な方法の研究

(2) (1)を踏まえて，「おおたかディスカッション・フォーマット」によるコミュニケーション活動を通して，ディスカッションに関する基本的な知識と技能に関する気づきを促す指導法の研究

(3) インプットした語彙及び語順・語法の知識を活用できるコミュニケーション活動を，以下の段階を踏みながら行い，情報や考えを『伝え合う』ための方策を身につけていくための段階的な指導法の研究

ア 教師主導による教師・生徒間のインタラクションを行う段階

イ 生徒が主導し，教師の補助によってインタラクションを行う段階

ウ 生徒同士のインタラクションを事前準備をしてから行う段階

エ 生徒同士で，事前準備をせずにインタラクションを行う段階

#### 4 小中学校との連携

(1) 域内小学校英語担当教員，中学校英語科教員対象研修会の実施

(2) 域内小学校へ本校英語教員及び本校国際コミュニケーション科生徒を派遣し，英語活動を行う出前授業「高校生が先生」の実施（生徒の移動のためにバスが必要）

### 3年目（平成28年度）

1 研究対象生徒 普通科・国際コミュニケーション科 第1学年，第2学年及び第3学年

2 学校設定科目「コミュニケーション活動Ⅱ」のシラバスの研究

○（年次目標）『論じ合う力』の育成

(1) 日常生活における身近な話題に関する情報や考えを即興的に伝えることができる。

(2) 聞いたり，読んだりして理解したことを応用し，自分の考えや意見を話したり，書いたりして伝えることができる。

(3) 自分の考えを論理的にまとめたり，相手の意見を批判的に分析したりすることができる。

(4) 社会的な話題について論じ合うことができる。

(5) 英検準2級レベルの語を **active vocabulary** として運用することができる。

### 3 目標を達成するための指導法の研究

- (1) ディスカッションによるコミュニケーション活動の指導法
- (2) 論理的思考力や批判的思考力を身につける
- (3) 語彙サイズの拡充 (**Input Activity, Output Activity** の開発)
- (4) 英文の語順や構文になれる指導法 (“**Easy Reading**” (多読指導) と教材開発)

### 4 小中学校との連携

- (1) 域内小学校英語担当教員, 中学校英語科教員対象研修会の実施
- (2) 域内小学校へ本校英語教員及び本校国際コミュニケーション科生徒を派遣し, 英語活動を行う出前授業「高校生が先生」の実施 (生徒の移動のためにバスが必要)

## 4 年目 (平成29年度)

### 1 研究対象生徒 普通科・国際コミュニケーション科 第1学年

### 2 「総合英語」「コミュニケーション英語I」の指導法の研究

- (年次目標) 4技能のバランスのとれた指導法と評価の一体化
  - (1) 4技能をバランスよく配置した授業展開の研究
  - (2) 2技能以上を統合した活動の研究
  - (3) インタビュー・テスト等を利用したパフォーマンス評価の研究
  - (4) 興味・関心・意欲の評価法の研究

### 3 小中学校との連携

- (1) 域内小学校英語担当教員, 中学校英語科教員対象研修会の実施
- (2) 域内小学校へ本校英語教員及び本校国際コミュニケーション科生徒を派遣し, 英語活動を行う出前授業「高校生が先生」の実施 (生徒の移動のためにバスが必要)

### ○平成27年度の進捗状況と課題

現段階で生徒達は身につけた単語を使用して意見や自分のことについて述べることができつつある。基礎的な文法知識を身につけながら、語彙を増やし社会的な事柄について話すことができるようにしていくことが課題である。

指導法については、担当者がミーティングをすることで、内容の精選を図りながらより効果のある授業実践を行っている。

また、他校への授業公開を2度行い、本校の実践を多くの教員に参考にしてもらいながら自分たちの能力向上にも役立てている。特に、小中学校の先生に授業の中での評価のあり方について役立っていると考えられる。

大きな課題としては、本校の生徒が小学校へ出向く、出前授業について本校生徒の安全のための輸送手段としてのバスの費用が当事業費で計上していただけないのは再考していただきたい。

- |     |           |             |
|-----|-----------|-------------|
| 第1回 | 7月10日(金)  | 市内小学校への出前授業 |
| 第2回 | 11月2日(月)  | 市内小学校への出前授業 |
| 第3回 | 12月15日(火) | 市内小学校への出前授業 |

## (6) 評価計画

## 1 年次

## 小学校

## 1 年目（平成 26 年度）

- 1 課題認識の的確性（英語教育強化地域拠点校英語担当者会での聞き取り）
- 2 計画や手順の妥当性（教員，保護者へのアンケートの実施 6 月，11 月）
  - ・児童の実態や学校，地域社会の現状を踏まえ無理のないものとなっているか。
  - ・児童の変容や保護者等の反応などが的確に把握されているか。
- 3 研究のねらいの達成度
  - ・小学校第 3，4，5 学年において，コミュニケーション能力の素地が養われているか。  
（授業中の見とりや成果物による児童の評価の蓄積，児童アンケートの実施 7 月，12 月）
  - ・小学校第 6 学年において，英語を聞いたり，話したり，読んだり，書いたりすることに慣れ，積極的にコミュニケーションを取ろうとする態度が育成されているか。  
（授業中の見とりや成果物，パフォーマンステスト，児童アンケートの実施 7 月，12 月）
  - ・教師の課題に対する認識や態度の変化（意識調査，聞き取り 11 月）

## 2 年目（平成 27 年度）

- 1 課題認識の的確性（英語教育強化地域拠点校英語担当者会での聞き取り）
- 2 計画や手順の妥当性（教員，保護者へのアンケートの実施 6 月，11 月）
  - ・児童の実態や学校，地域社会の現状を踏まえ無理のないものとなっているか。
  - ・児童の変容や保護者等の反応などが的確に把握されているか。
- 3 研究のねらいの達成度
  - ・小学校第 3，4 学年において，コミュニケーション能力の素地が養われているか。  
（授業中の見とりや成果物による児童の評価の蓄積，児童アンケートの実施 7 月，12 月）
  - ・小学校第 5，6 学年において，英語を聞いたり，話したり，読んだり，書いたりすることに慣れ，積極的にコミュニケーションを取ろうとする態度が育成されているか。  
（授業中の見とりや成果物，パフォーマンステスト，児童アンケートの実施 7 月，12 月）
  - ・教師の課題に対する認識や態度の変化（意識調査，聞き取り 11 月）

## 3 年目（平成 28 年度）

- 1 課題認識の的確性（英語教育強化地域拠点校英語担当者会での聞き取り）
- 2 計画や手順の妥当性（教員，保護者へのアンケートの実施 6 月，11 月）
  - ・児童の実態や学校，地域社会の現状を踏まえ無理のないものとなっているか。
  - ・当初のねらいどおりに研究が進行しているかどうか。
  - ・教職員の士気が高まっているか。
- 3 研究のねらいの達成度
  - ・小学校第 3，4 学年において，コミュニケーション能力の素地が養われているか。  
（授業中の見とりや成果物による児童の評価の蓄積，児童アンケートの実施 7 月，12 月）
  - ・小学校第 5，6 学年の授業時数増加にともない，英語を聞いたり，話したり，読んだり，

書いたりすることに慣れ、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度が育成されているか。

(授業中の見とりや成果物, パフォーマンステスト, 児童アンケートの実施 7月, 12月)

- ・教師の課題に対する認識や態度の変化 (意識調査, 聞き取り 11月)

#### 4年目(平成29年度)

##### 1 研究のねらいの達成度

- ・小学校第3, 4学年において, コミュニケーション能力の素地が養われているか。

(授業中の見とりや成果物による児童の評価の蓄積, 児童アンケートの実施 7月, 12月)

- ・小学校第5, 6学年において, モジュールの時間を効果的に活用し, 英語を聞いたり, 話したり, 読んだり, 書いたりすることに慣れ, 積極的にコミュニケーションを取ろうとする態度が育成されているか。

(授業中の見とりや成果物, パフォーマンステスト, 児童アンケートの実施 7月, 12月)

- ・教師の課題に対する認識や態度の変化 (意識調査, 聞き取り 11月)

##### 2 研究の結果得られた結論の実証度

(「児童生徒の実態把握→到達目標→手立て(実践)→評価」のサイクルに従い検証)

##### 3 研究成果の一般性

- ・研究内容は, 市内全中学校区で実施可能か。

(市主催の研修会での報告)

#### ○平成27年度の進捗状況と課題

(鱒ヶ崎小学校)

- ・英語教育に対するアンケートを年に2回行い, その変容について分析した。
- ・単元で1枚の自己評価カードを使い, 単元の中での児童の変容を評価できるようにした。
- ・5, 6年生では, 「外国語表現の能力(話す)」「外国語理解の能力(聞く)」を評価できるよう, パフォーマンステストでは明確な評価基準を作成し, 評価した。
- ・授業中の見とりによる評価の仕方の検討が今後の課題である。

(南流山小学校)

- ・どの学年も振り返りカードを毎回行い, そのデータを蓄積することで, 全体の傾向を捉えるだけでなく, 個々の児童の変化を見とることができた。
- ・第3, 4学年については, メタ認知がまだ発達していない段階であることから, 振り返りカードの在り方や授業中の見とりの仕方などについて, さらなる研究が必要である。
- ・第5, 6学年においては, 単元ごとにループリックを作成する取り組みを始めた。このことで, 教師と児童が目標や活動のねらいを共有することができた。また, 日ごろの振り返りカードやワークシート等に加えて, パフォーマンスでの評価にも取り組んでいる。パフォーマンス課題に向けて段階的な指導を行うことで, 日々の実践への指導改善に役立てたり, 複数の担任が共同でループリック作ることで, 学年間で共通理解を図ることができたりという効果が見られた。

(西初石小学校)

- ・英語科における「読む」「書く」の評価活動をどのように実施するか, 拠点校会議や校内の担当者と話し合い, どの活動でどんな評価をするのかが明確になった。

- ・中学年はたくさんの英語に触れさせる活動をたくさん取り入れた。英語を使った簡単な紹介活動を取り入れることで、伝える必然性が生まれコミュニケーションツールとしての英語となっていた。
- ・評価活動としてのパフォーマンステストが定着しつつある。中学年はプレゼンテーションを中心に、高学年は面接方式でのパフォーマンステストを実施した。高学年の面接方式でのパフォーマンステストでは、授業内で使った問答の他に関連する質問をランダムに1問実施したが、ほとんどの児童が自然な会話の中で答えることができた。

## 中学校

### 1年目（平成26年度）

- 1 課題認識の的確性（英語教育強化地域拠点校英語担当者会での聞き取り）
- 2 計画や手順の妥当性（教員への聞きとり・アンケート 11月）
  - ・生徒の実態や学校，地域社会の現状を踏まえ無理のないものとなっているか。
  - ・生徒の変容や保護者等の反応などが的確に把握されているか。
- 3 研究のねらいの達成度
  - ・主に第1学年において，小学校との継続性のある指導方法，指導内容，カリキュラムとなっているか。（カリキュラムの妥当性の検証，中学1年生へアンケートの実施）
  - ・中学校において「表現の能力」「理解の能力」が向上しているか。  
（パフォーマンステスト，定期テスト 第1学年 6月 11月）  
（外部検定試験の結果分析 第3学年 9月 12月）
  - ・教師の課題に対する認識や態度の変化  
（意識調査，聞き取り 英語科職員 1月）

### 2年目（平成27年度）

- 1 課題認識の的確性（英語教育強化地域拠点校英語担当者会での聞き取り）
- 2 計画や手順の妥当性（教員への聞きとり・アンケート 11月）
  - ・生徒の実態や学校，地域社会の現状を踏まえ無理のないものとなっているか。
  - ・生徒の変容や保護者等の反応などが的確に把握されているか。
- 3 研究のねらいの達成度
  - ・主に第1学年と第2学年において，小学校との継続性のある指導方法，指導内容，カリキュラムとなっているか。（カリキュラムの妥当性の検証，中学1年生へアンケートの実施）  
7月
  - ・中学校において「表現の能力」「理解の能力」が向上しているか。  
（パフォーマンステスト，定期テスト 第1学年，第2学年 6月 11月）  
（外部検定試験の結果分析 第3学年 9月 12月）
  - ・教師の課題に対する認識や態度の変化  
（意識調査，聞き取り 英語科職員 1月）



### 3年目（平成28年度）

- 1 課題認識の的確性（英語教育強化地域拠点校英語担当者会での聞き取り）
- 2 計画や手順の妥当性（教員への聞きとり・アンケート 11月）
  - ・生徒の実態や学校，地域社会の現状を踏まえ無理のないものとなっているか。
  - ・生徒の変容や保護者等の反応などが的確に把握されているか。
- 3 研究のねらいの達成度
  - ・全学年において，小学校との継続性のある指導方法，指導内容，カリキュラムとなっているか。（カリキュラムの妥当性の検証，中学1年生へアンケートの実施 7月）
  - ・中学校において「表現の能力」，「理解の能力」が向上しているか。  
（パフォーマンステスト，定期テスト 第1学年，第2学年 6月 11月）  
（外部検定試験の結果分析 第3学年 9月 12月）
  - ・教師の課題に対する認識や態度の変化  
（意識調査，聞き取り 英語科職員 1月）
- 4 研究の結果得られた結論の実証度  
（「児童生徒の実態把握→到達目標→手立て（実践）→評価」のサイクルに従い検証）
- 5 研究成果の一般性
  - ・研究内容は，市内全中学校区で実施可能か。  
（市主催の研修会での報告）

### 4年目（平成29年度）

- 1 研究のねらいの達成度
  - ・小学校英語科との継続性のある指導方法，指導内容により，小学校第3学年から中学校第3学年まで一貫性のあるカリキュラムとなっているか。（カリキュラムの妥当性の検証，中学1年生へアンケートの実施）7月
  - ・中学校において「表現の能力」，「理解の能力」が一層向上しているか。  
（パフォーマンステスト，定期テスト 第1学年，第2学年 6月 11月）  
（外部検定試験の結果分析 第3学年 9月 12月）
  - ・教師の課題に対する認識や態度の変化  
（意識調査，聞き取り 英語科職員 1月）
- 2 研究の結果得られた結論の実証度  
（「児童生徒の実態把握→到達目標→手立て（実践）→評価」のサイクルに従い検証）
- 3 研究成果の一般性
  - ・研究内容は，市内全中学校区で実施可能か。  
（市主催の研修会での報告）

#### ○平成27年度の進捗状況と課題

（南流山中学校）

市内の ALT を全員招いての interview test，ビデオカメラに録画する speech や presentation などの performance test を各学期に行っている。生徒には，performance test が重要であるという意識は定着しつつあるように感じる。

「気持ちを伝える」ということに重点を置いており、評価の観点には *passion* や *smile, eye contact* などを取り入れている。そこでの点数の割合を *pronunciation* や *fluency* 等よりも、時には高めに設定している。準備を含めるとかなり時間がかかる活動なので、進度が遅れがちになることが課題となっている。

(西初石中学校)

(1) 課題認識の的確性

- ・拠点校英語担当者会で、小学校の課題と中学校の課題、更に同じ学区の小学校とも話し合いを進めることでそれぞれの課題や方向性を理解しあうことができた。

(2) 計画や手順の妥当性 (教員への聞き取り・アンケート11月)

- ・アンケートを実施することで、現時点での生徒の英語への意識が分かり、今後の指導に生かすことができた。

(3) 研究のねらいの達成度

- ・中学校において「表現の能力」「理解の能力」は、各学年でパフォーマンステストを何度も実施することで話す力がつき、向上をしていることが分かる。外部検定試験の結果分析においても、中学校3年生の50%以上が英語検定3級以上の力を持っていることが証明された。

## 高等学校

### 1年目 (平成26年度)

1 定期考査(筆記テスト)をせず、パフォーマンスを評価する。

- (1) 評価シートによるスピーチの絶対評価(ビデオ撮影による担当者全員による評価)
- (2) スピーチにおける自己評価シートの利用
- (3) インタビュー・テストによる評価
- (4) ポイントカードを利用したコミュニケーションを図ろうとする態度の評価

2 到達目標に対する達成度を評価する。

語彙サイズ・テスト(望月テスト)を行う。

3 外部評価テストを行う。

- (1) 国際コミュニケーション科1年生全員が英語検定を受検し、データの分析を行う。
- (2) 普通科・国際コミュニケーション科1年生全員に対し、興味・関心・意欲を測定する意識調査を行う。

### 2年目 (平成27年度)

1 定期考査(筆記テスト)をせず、パフォーマンスを評価する。

- (1) パフォーマンス評価シートの利用
- (2) 授業での観察評価
- (3) 4技能のバランス及び2技能以上を統合した評価

2 到達目標に対する達成度を評価する。

- (1) インタビュー・テスト: 情報量とその内容の評価
- (2) ライティング・テスト: 情報量とその内容の評価
- (3) 語彙サイズ・テスト(望月テスト)を行う。

### 3 外部評価テストを行う。

- (1) 国際コミュニケーション科1年生及び2年生全員が英語検定を受検し、データの分析を行う。
- 4 普通科・国際コミュニケーション科1年生全員に対し、興味・関心・意欲を測定する意識調査を行う。

### 3年目（平成28年度）

#### 1 定期考査（筆記テスト）をせず、パフォーマンスを評価する。

- (1) パフォーマンス自己評価シートの利用
- (2) 授業での観察評価

#### 2 到達目標に対する達成度を評価する。

- (1) インタビュー・テスト：情報量，英語の質，論理的思考力及び批判的思考力の評価
- (2) ライティング・テスト：情報量，英語の質，論理的思考力及び批判的思考力の評価

#### 3 語彙サイズ・テスト（望月テスト）を行う。

#### 4 外部評価テストを行う。

- (1) 国際コミュニケーション科全員が英語検定を受検し、データの分析を行う。
- 5 普通科・国際コミュニケーション科1年生全員に対し、興味・関心・意欲を測定する意識調査を行う。

### 4年目（平成29年度）

#### 1 CAN-DO リストを利用した評価を行う。

- (1) CAN-DO リストを利用し生徒の学習到達度を測定し、データの分析を行う。
- (2) CAN-DO リスト及び4技能の測定方法が適切であるかを分析する。

#### 2 パフォーマンスの評価を行う。

- (1) 40人のクラスサイズでの授業において、「聞く」「話す」のパフォーマンスを測定し、評価を行う。
- (2) 全体の評価の中でのパフォーマンス評価の割合を高める。

#### 3 語彙サイズ・テスト（望月テスト）を行う。

- 4 外部評価テストとして国際コミュニケーション科1年生全員が英語検定を受検し、データの分析を行う。
- 5 普通科・国際コミュニケーション科1年生全員に対し、興味・関心・意欲を測定する意識調査を行う。

#### ○平成27年度の進捗状況と課題

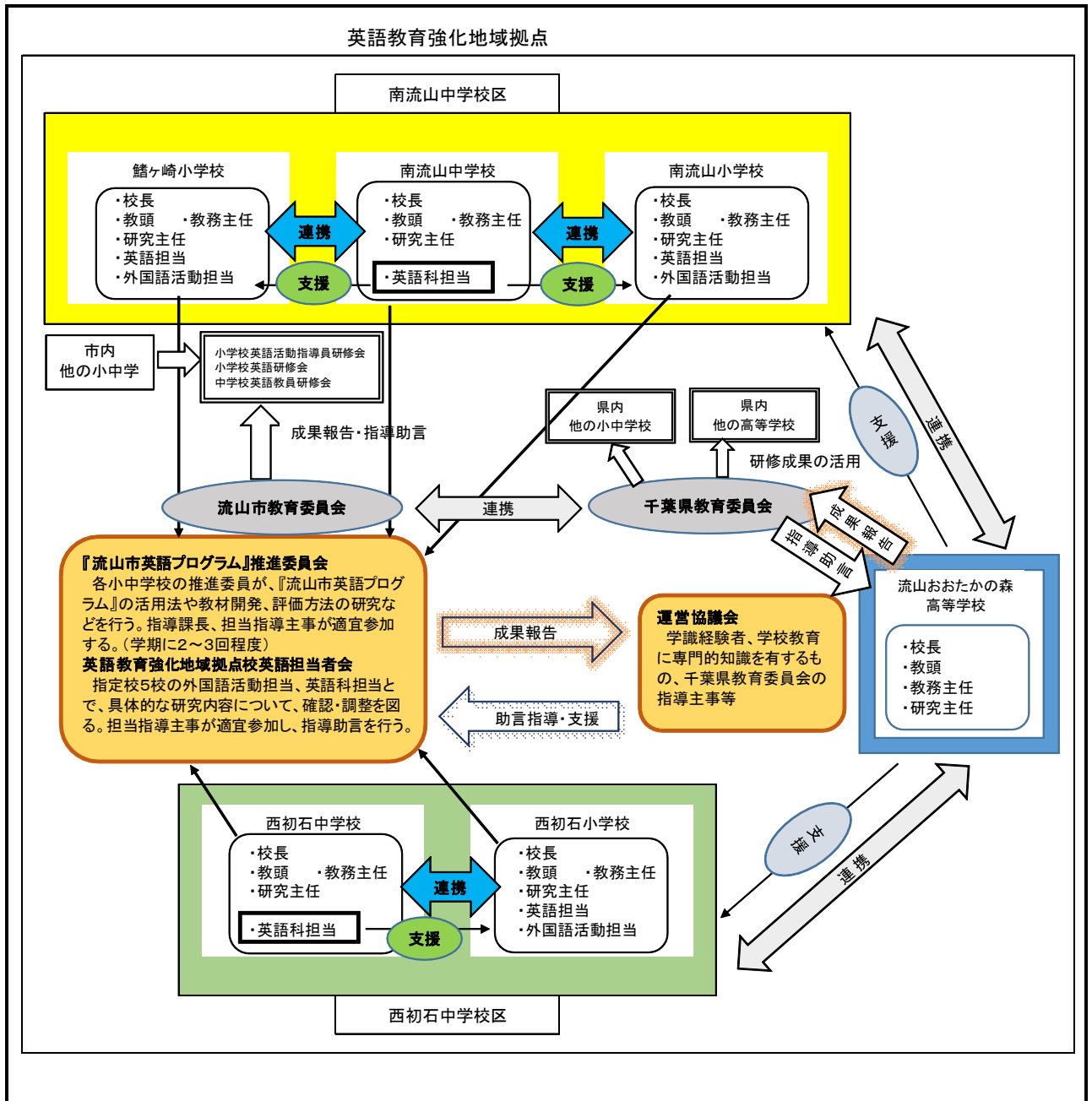
- ・本校の評価方法が小中学校にも浸透しつつある。2年目となり、小中高の交流がよくなされてきた良い例である。
- ・県内の高校からも、本校の評価方法を学ぶために来校している。
- ・課題としては、本校の学力が伸びているなかで、現状にあった内容をつくりあげていく必要がある。

変更点

・望月テストと普通科・国際コミュニケーション科1年生全員に対し、興味・関心・意欲を測定する意識調査は実施していない。これについては拠点校の小学校、中学校で実施しているものを利用しながら改善していきたい。

4. 研究組織

(1) 研究組織の概要



## (2) 運営協議会

## ①活動計画

流山市英語教育強化地域拠点校研究推進委員会及び指定校6校の外国語活動担当，英語科担当と連携を図りながら，研究のねらい，方向性，研究内容，方法，評価等について指導，助言，評価を行う。

## 第1回運営指導協議会（5月）

○研究のねらい，方向性，研究内容等についての確認・調整を図る。

- ・有識者による講義
- ・流山市英語教育強化地域拠点校英語担当者会からの報告  
(研究のねらい，方向性，研究内容，方法，評価等)

## 第2回運営指導協議会（10月）

○研究過程の進捗状況について

- ・有識者による講義
- ・流山市英語教育強化地域拠点校英語担当者会からの報告
- ・運営協議会委員による指導・助言

## 第3回運営指導協議会（2月）

○研究成果のまとめ，次年度研究の方向性について

- ・流山市英語教育強化地域拠点校英語担当者会からの報告
- ・運営協議会委員による指導・助言

○平成27年度の進捗状況・課題

## 第1回運営指導協議会（6/1）

- ・県教育委員会より，国及び県の英語教育に係る施策や本事業の趣旨を説明した。
- ・流山市教育委員会より，研究のねらい，方向性等について確認し，協議した。

(主な協議内容)

- ・教育課程について（本年度の取組）
- ・目標及び学習内容について
- ・検証方法及び評価方法について等

## 第2回運営指導協議会（11/2）

これまでの研究の進捗状況及び9月29日に実施した南流山中学区の公開授業について報告し，今後の研究の方向性を確認した。

(主な協議内容)

- ・教育課程について（5，6年生で教科化になるにあたって）
- ・学習内容（補助教材等）
- ・評価について（特に小5，6年生の評価の在り方）
- ・フォニックスについての研修（小・中教諭向けに高校から提案）

## ○運営指導協議会であげられた課題

- ・新学習指導要領で小学校5，6年が教科化になるにあたって，研究校の取り組む目標を統一していく必要があるのではないか。課題としては，以前から外国語活動に力をいれてきた学校とそうでない学校では当然取組の進み具合に差がある。そのため，担当者会議等でさらに取組状況について確認しながら進めていく必要がある。
- ・小学校5，6年生で教科化になるにあたって評価の仕方をどのようにしていくべきか。これについては，評価の在り方について研究していくのが，研究校の役割であると講師の先生から指導を受け，各校で小学校5，6年生で2コマになるにあたっての年間計画や評価方法について検討している。
- ・運営指導協議委員の先生方からは，年間3回の運営指導協議会に参加いただき，各学校の取組がその学校だけの取組にならないよう幅広い視野と観点から指導いただいている。例えば目標設定にしても，外国語教育をやる意義は何なのか，またグローバル人材を育成することとはどういうことなのか，どのような能力をつけるため，どのような教育をしていったらよいのかなど深く考えて目標設定していく必要があると指導いただいた。
- ・高校からは，小学校の英語の免許をもたない先生方に音声学の研修が必要とのことで，高校側から提案があり，音声学の第一人者の先生を講師に2回研修を計画，実施している。また高校で実施していたパフォーマンステストの在り方を小・中学校に紹介することで，小・中学校における評価の在り方についても情報を共有でき，何より学校種の違う教諭同士が交流をもてたことにより，小・中・高の連携した英語教育の推進により影響を与えている。
- ・高校側からは，年間5回ほど，市内の小学校へ出前授業として高校生が出向き，英語の身近なユーザーとしての姿を示し，高校生にとっても小学生にとっても，「より英語でコミュニケーションを図りたい。英語をもっと話せるようになりたい。」という大きな効果を生んでいる。しかし生徒の安全な輸送のためのバスの使用料に対する予算が国で認められないため，研究校では，今後どのように研究を進めていくか，思案している。  
国の予算執行制限に対する柔軟な対応をお願いしたい。

## 5. 年間事業計画

月	強化地域拠点の取組	運営協議会
4月	小中学校 ALT 研修会 (4/3・6・7・8) 小学校英語活動指導員研修会 (4/15)	
5月		
6月	第1回運営指導協議会 (6/1) 第1回英語教育強化地域拠点校英語担当者会 (6/3)	第1回運営協議会
7月	第2回英語教育強化地域拠点校英語担当者会 (7/16) 第1回『流山市英語プログラム』推進委員会 (7/14) 流山おおたかの森高校出前授業 (7/10)	

8月	中学校英語教員研修会（8／4） ブロック別小中学校英語研修会（8／24・25） 小学校英語活動指導員研修会（8／24・25）	
9月	授業公開（南流山中学校区）（9／29） 第2回『流山市英語プログラム』推進委員会（9／7）	
10月	第3回英語教育強化地域拠点校英語担当者会（10／19） 第3回『流山市英語プログラム』推進委員会（10／23）	
11月	第2回運営指導協議会（11／2） 第4回英語教育強化地域拠点校英語担当者会（11／24） 第4回『流山市英語プログラム』推進委員会（11／25） 流山おおたかの森高校出前授業（11／2）	第2回運営協議会
12月	第5回英語教育強化地域拠点校英語担当者会（12／14） 流山おおたかの森高校出前授業（12／15）	
1月	第6回英語教育強化地域拠点校英語担当者会（1／20） 第5回『流山市英語プログラム』推進委員会（1／15）	
2月	授業公開（西初石中学校区）（2／15） 第3回運営指導協議会（2／15）	第3回運営協議会
3月	第7回英語教育強化地域拠点校英語担当者会（3／15） 第6回『流山市英語プログラム』推進委員会（3／2）	
【その他の取組】中学校区ごとに、学校開放日等の相互授業参観を行ったり、適宜日程を調整して打合せ等を行ったりする。		